

1. 長めの前置き

エコ検定を受けてきた。正式には「環境社会検定試験」という。

話せば長い、会社では社内教育というものがある、先輩社員が後輩社員に対して実地で教育を施すということになっている。これを **OJT(On the Job Training)** という。たいていの会社でやっていると思うが、致命的なことが二点ある。一点目は先輩や上司がいない職場の方が多いということだ（私の今の職場には経理の先輩はいない）。二点目は先輩がいたとして、彼に後輩を教導だけの心と時間の余裕がない場合が圧倒的である。何もかも20年にもわたった長い不況のせいではあるが、新入社員が10人いれば8人は放置される。

そこで会社が考えることは「教育をアウトソーシングしよう」ということである。**OJT** は **OJT** として重要なので建前上はこれを推進する（そうでないと応募すら来ないのではないか）。そのフォローとして研修制度を整備する。本社に講師を招いて若き社員たちに会社経営に必要な知識を与えていこうというものである。研修は色々あって、社員は自由にこれを選ぶことができる。一応、何年目までにこの研修とこの研修を受けてくださいねという必修も用意されている。

ここにも落とし穴はある。本社から遠く離れたところに勤務している人や、私のように繁忙期になったら本社なんか行く暇もないというような人に集合研修は不向きである。

しかし会社は賢い。そんなものぐさな社員にも救いの道を残してくれている。通信教育である。ペン習字から上司のあしらい方に至るまで、様々な通信教育メニューが用意されており、補助してくれる。必修になっている研修も通信教育で代替可能だ。大変ありがたい。

「大卒は自分で自分を教育する方法を身につけている者」と私は考えているので、さっさと通信教育を始めることにした。通信教育は費用が掛かるが、自分の身になる自己投資だし、会社の補助もある。何より朝早めに来てちょっとやって、昼にまた少し進めて、夕方仕事が早く終われば残りをやって、というように隙間時間を使えるというのが気に入った。一年間で3回申し込みができる。今年は必修を全部つ



＜シルバーウィークの頃のライチョウのヒナ＞
厳しい冬を乗り越える為に、頑張ってお飯を探し歩いている。努力が大事。

ぶすことにした。

今年の1回目の申し込みの際は、経理の通信教育をやることにした。経理職としては今更必要ない講座ではあるが、必修なので仕方がない。しかしこれだけではいかにもつまらない。もっと何かやりたい。やはりある程度の手ごたえは感じたいのだ。

通信教育のメニューを見ていて、エコ検定の通信教育が目にとまった。前々からエコ検定には興味があった。大体自然科学系の学科を出て、いまだにライチョウのことをやっているのに、この検定を受けていないのは駄目だろう。これは **must** だ。

2. エコ検定公式テキスト

通信教育を申し込むと、エコ検定公式テキストと公式問題集、それから「勉強してですよ」ということを示すためのレポート冊子がついてきた。レポートはエコ検定の問題形式に準じている。期限までにテキストを読んで、レポートを提出すれば修了。検定は自分で申し込む。

先に経理の通信教育をさっさと済ませた。ほとんどテキストも読まずに、問題だけ解いてめでたく修了。

さて、エコ検定である。通信教育は夏からだだったので、12月の検定試験を受けることを前提に勉強を開始した。テキストを読む。それだけである。特にこの間について面白いことは何もないので書くこともないが、一応言っておくと、特に難しい内容はないし、一生懸命暗記する必要もなかったと書いておく。

内容は「私たちを取り巻く環境についての諸問題の提起とその解決方法として取り組まれていること」といっていいと思う。

一通り読んで11月から公式問題集に取り組んでみたが、問題はとても易しい。正誤を問う問題と語句を選ぶ問題があって、どこかの教授が出すようなひっかけ問題のようなものはなく、内容を理解していれば解くことができるものばかりである。公式問題集を解くことで、ここが大事なのだなというところをテキストに戻って確認する。

中学生以上なら誰でも取り組める内容だ。また、ニュースなどを見ていれば **COP** 何とかがどうのとか、温暖化がどうのとか、私たちの身近な話題ばかりである。

何よりテキストの出来が良い。どこかの教授が書いた学生から金を巻き上げるためだけの本とは大違いである。本当によくできている。別に私は商工会議所の手先ではないが（エコ検定の主催は東京商工会議所である）、これだけ親切なテキストに出会ったことはないのだからこの際胡散臭いと思われてもかまわないので褒めちぎっておく。

最初はたくさん用語が出てきて、覚えきれないなあこんなのも思っていたが、節が進んでいくと、同じ用語が何度も何度も登場し、そのたびに簡単な解説が入り、一番詳しい解説がなされているページへの案内も記されている。索引も充実している。もちろん編集に当たった人たちの努力の賜物であるが、もう一つ「ほとんどの環境問題は何らかの関わり合いを持っているのでこうなった」と私は考えている。一から十まで順番に積み上げで

説明することなど不可能なのだ。互いが互いに関連しあうような網目構造を持っているのが環境問題だ。

また、スタンスに偏りがなくとも好感を覚えた。どこかの新聞社の出版物のように読み手の考えをどこかへ誘導しようという意図がまったくない。ただただ、こういう事実がある、こういう取り組みがある、こういうことが持続可能な未来にとって大切なのだという事実を丁寧に、論理的に指摘していく。大変公平である。

ライチョウの為に何かをしたくてたまらないという人がいるとすれば、むやみに高山に出かけて、寒さでがくがくふるえて二度とごめんだと言ってライチョウに興味をなくしてしまう前に一度エコ検定に取り組んでいただきたい。その上でライチョウに会いに行ってみてほしい。私たちが今、本当にしなければならないことが見えてくるはずだ。

学習する中で私が感じたことを4つほどご紹介したい。きっと何かのヒントになると思う。

3. Think globally, Act locally

野生生物を取り扱っていた恩師の研究室には壮大な夢を抱えた学生が訪れたものだった。ゾウをやりたいとか、ジュゴンをやりたいとか。今も野生生物の研究室の戸を叩く学生の中にはそういう人がいるのだろうか。

動物が好きだから野生生物の研究がしたい。それは別に構わないのだ。北極の海氷が溶けて、ホッキョクグマが困っている、温暖化でライチョウが逃げ場を失ってしまう、たくさんの生物が困っている。そういうことに思いを馳せるのはとてもいいことだ。私も今、アイスランドの荒涼とした平原の、真夏の白夜の中で楽しく暮らすライチョウに思い馳せているところだが、研究しようとなるとこれは話が変わってくる。

ホッキョクグマのいるところまで行くのに何百万かかるのだ。誰がそんな金を出すのだ。アラブの富豪やビル・ゲイツや高須医院長を説得しに行くしかないのではないか。

夢を語って、それが人を動かし、お金を動かせるならいくらでもやっていい。けれど、学生にはできない。やろうと思うなら社長か何かにならなければだめだ。人脈と信用と名声を背景に、思うままにやればいい。

テキストを読んだ中で私が最も重要性を感じた言葉が **Think globally, Act locally**. だった。地球規模で考えなさい、そして地域規模で活動しなさいという意味になる。

最優先でやらなければいけないことは私たちの「ライフスタイルの改善」である。山に登ってライチョウを見つめ、温暖化について考え、私たちの未来を憂い、そして山から下りて、そして、ある日ふと「私がゴミを少し減らせば、ライチョウは助かるかな」そう思っただけでいい。歩いて15分のスーパーに行くのにサンダルでも突っかけるかのように車に乗ったその時に「今日は、歩こうかな」そう思ってエンジンを切ってほしい。それが、そのほんの少しの思いが、とても大事なのだ。

もちろんライチョウの研究活動に参加してくれるなら幸いだけれども、「私にはとてもラ

イチョウに関わるだけの体力も気力もない」そこで思考を止めないで欲しい。本当に大事なものは、ライチョウから学び、自分を変えていくことなのだ。決して、現地に行って何かをすることだけが保護ではない。今、私がやろうとしたことがライチョウを助けることにつながるかどうか、それを考えてほしい。

Think globally, Act locally. この言葉を胸にとどめておきたい。



<イワヒバリ>

高山ではホシガラスとともになじみ深い鳥。

非常に物見高いようで、人間に近いところまで来てくれる。

4. 未来の都市

日本最大の田舎は埼玉県だと言うと異を唱える人はいるかもしれないが、富山は田舎であるといえば、まあそうかなとおおむね同意してもらえらると思う。

しかし、私が今年訪れた富山駅は学生の頃に見たあの富山駅ではなかった。あの頃の富山駅はこんなにスマートで小奇麗なつくりではなかった。そして富山市は路面電車の走る街である。車で右折した先に路面電車がいるとちょっと驚かされる。路面電車というと古臭いイメージになってしまうので、LRTと呼ぼう。LRTとはライトレールトレインのこと

である。路面に対して乗降口がほぼフラット。静かにのんびり走る。そういえば富山が舞台になっていたアニメにも、この近未来的な LRT が出ていた。

エコ検定のテキストを読んでいて初めて知ったのだが、富山市は「コンパクトシティ」を目指しているそうだ。全国では富山市の他に青森市が取り組んでいる。LRT はその一環で、もともと富山市には富山地鉄の路面電車が走っていたが、路線を改修し一部を環状線化(2009)したり、富山駅の北側にも LRT を開通させたりして (2006) 利便性を高めた。そして市の中心部に公共施設を集めて LRT でのアクセスを促す。

田舎の常として、自動車が必須なのは富山も変わらない。けれど高齢者は自動車に乗れなくなってくるし、一人が移動するのに一台の車を動かすというのはエネルギー効率が非常に悪い。かといって、電車に乗ろうとしても、田舎の電車にありがちな「一時間に一本」というのも不便だ。私が今 70 歳になった気持ちで駅というものを見てみれば階段、改札、券売機、何もかも不満である。

富山の路面電車の歴史は古く、戦前から走っていたそうだ。戦後、高度成長期を経てモータリゼーションが進むにつれて、衰退していった。路線も減ってしまったが、21 世紀になって「低炭素社会」「循環型社会」「自然共生型社会」へと舵を切るために、もう一度路面電車の良さが見直し、町のつくり自体を変えようとしている。LRT ならいっぺんに多くの人を運べるので、車よりも省エネルギーだ。高齢者にも配慮がされているし、子供のいる世帯も自動車で送り迎えしなくて済むし安全が確保される。時刻表を見てみると 1 時間に 3 本は来るようだ。富山駅には新幹線も止まるようになった。観光客にとっても路面電車はうれしいだろう。

さすが県の鳥にライチョウを掲げる富山である。未来に向けた町づくりを考えているのだ。

かつて私たちはたくさん人口を増やし、山あいにも家建ててきた。自立したら庭付き一戸建てを建てることを推奨し、それが幸せな家庭の在り方なのだと思います。

少し考えてみてほしい。

郊外にドンと家を構え、朝は駅まで自転車、長時間車に揺られて町の中心部まで行き、仕事をして帰ってくる、この行き帰りの時間でロスしている時間やエネルギーがあるのだ。休日には家族を車に乗せて、郊外の巨大ショッピングモールへ出かけてフードコートのファストフードで食事をし、ショッピングをする。疲れて帰ってきた家は広々しているが、広すぎてエアコンが効きにくい。そんな生活。

何が幸せかは自分が決めることだが、あまりにも固定観念にとらわれていないだろうか。

たくさんのライフスタイルがあって、それがそれぞれ実現されるような都市が望ましい。しかし、自分が一生住むのであれば、リタイアして以降に暮らしやすい町を選びたい。都会過ぎず、田舎過ぎず、車を使う必要はなく、歩いて行ける範囲に必要なものが一通りそろろう、そんな町づくり。それ自体が、地球環境で低負荷になる。

富山市のような「低炭素」「循環型」「自然共生型」都市に住みたい人が増えれば幸いである。



<7月中旬のライチョウのヒナ>

ライチョウはじっとしていれば、向こうからこちらの足元に来てくれる。

コツは自分も自然と一体化し、けして追いかけないこと。

5. 「もったいない」

2005年国連の会議の場でケニアの副環境大臣ワンガリ・マータイ氏より「もったいない」という言葉が紹介された。もちろんケニア語ではなく日本語である。

語句についての説明は省略するが、いわゆる 3R=Reduce, Reuse, Recycle を端的に示すと「もったいない」であると感じた。

「Recycle すればいいでしょ」という考えの方がいるが、私は紙の町出身者として「段ボールを段ボールにリサイクルするには、ものすごい石油、石炭、ガスがいるんですよ！」と強く言いたい。古紙問屋さんに運んでプレスするのにかかる輸送コスト、工場に運ぶコスト、これを水でドロドロにして抄きなおすのには自前の発電所で作った電気と、紙を乾かすのに発電所の蒸気がある。それから、水がすごく汚れるので、これを綺麗にするのにもコストがかかる。「これだけエネルギー使って一生懸命作っている紙なんだからもっと大

事に使って、もっと高く買ってよ！」そうすれば製紙会社だってこんなにたくさんの二酸化炭素を排出し、木を伐り、木を植えるという苦勞をしなくて済むのだ。おまけに生産コストに見合うだけの値もつかない。安く売り、安く買い、大量にリサイクルに回す。なんでもったいないことをしているのだろう。

もったいないは日本の言葉なのに、日本人はもったいないを忘れていてのではないか。

まずは **Reduce** だ。減らすこと。紙の本には本の良さがあるが、電子書籍にも良さはある。擦り切れるまで読みたい本は買い、読み捨てるような雑誌は電子書籍でいいではないか。このほか、現代は通販が充実し、頼めば翌日に届くという驚異のスピードに甘えてつい買ってしまいが、どうしても通販でしか手に入らないもの以外はスーパーに出かけて買えば無駄な段ボールの使用が減る。

食べ物もだ。スーパーで他人の買い物かごを覗くのはあれだが、一体何人家族だろうという分量の買い物をしていく人がいる。大きな冷蔵庫を買って、まとめ買いをし、食品を詰め込んで、気づかないうちに腐っていく豆腐やら瓶詰めがどれだけあるだろう。その日食べる分だけ買って、新鮮なうちに食べたほうが食品廃棄量は確実に減り、実はその方が経済的でもある。旬のものを買うようにすれば安くつくし生産コストも少なくて済む（旬産旬消）。地元の農産物を優先すれば輸送による環境負荷も減らせる（地産地消）。

Reuse も見直したい。私は物持ちがいいので、大学に入った頃買った黒い木綿のリュックサックをいまだに使っていて、久々に会った後輩に「まだ使ってるんですか!？」と、たいそう驚かれた。リュックに限らず衣服も相当長々と使う。一年に一回買い替えるのは靴だけだ。

こんなことを提案したい。親はできるだけ仕立ての良い服を、少なく買うように心がける。子供は成長が早いから、安い服を買い与えればいい。昔は兄弟のおさがりがあったが、今はそもそも兄弟自体が少ないことが多いので、そこは仕方がない。十分育ったら、自分が着ていた服やカバンを譲る。コートや着物、仕立て直しのできるスーツなどに限られてしまうが、こうすることで子供にも「もったいない」という心が伝わるだろう。

公式テキストで学んだ言葉に **ファストファッション** というものがあつた。薄くてペラペラの、安物衣料をたくさん買って、飽きたら捨てるという意味だ。日本の衣類年間消費量 250 万 t。そして 200 万 t がゴミかリサイクルに回っている。どれだけ無駄なことをしているのだろう。日本の人口が 1 億 2 千万人である。計算上 1 人年間 21kg の衣料品を買い 17kg も服を捨てているのだ（ズボンからシャツまで着て 1~2kg といったところである）。

私のように地味なフリースを 10 年以上使う人も珍しいかもしれないが、衣類は **TPO** に合った物と、自分らしい装い、この 2 点を抑えて、仕立ての良いものを見抜いて購入したい。

Recycle は最後の最後の手段である。その前に **Reduce**、**Reuse** を実践しなければならない。そのためには「もったいない、もったいない」心の中でつぶやき続けることだ。



<8月初頭富士山須走口下山道のニホンジカ（写真中央部2頭）>

会社の同僚と行った富士山にて。標高2,500m付近。

森林限界付近はシカやサルの棲み処ではない。彼らがなぜこんなに食料の少ない厳しい環境に來なければならなかったのか、彼らの立場で考え、その上で私たちの生活を見直す必要がある。

6. 消えていく多様性

エコ検定の公式テキストの中では生物多様性に関しては相当なページを割いているが特定の生物に関して言及された項目はほとんどない。ライチョウも希少生物種のリストに紹介される程度である。このあたりに、このテキストの編集者の意気込みを感じる。

大切なことは「**生物多様性**が失われる」事である。ライチョウという種が絶滅すると「多様性」が失われるのである。ライチョウという種だけが日本列島の中で格別重要であったり、格別役に立ったりしているわけではなく、彼らがいなくなると「生物多様性が失われる」のである。シカもサルもクマも日本列島の生物多様性の中の一部を担っているの

ある。みんな等しく大切な生き物たちだ。



<ヤチネズミ>

うっかり筆者の目の前に走り出てきてしまったヤチネズミ。咄嗟に登山道の石の隙間に隠れたつもり、らしい。

ライチョウのように目立ちはしないが、彼らも高山帯の種多様性の一部を担っている大切な仲間である。

それほど重要視されている**生物多様性**とは何なのか。

生物多様性条約では、生物多様性を「生態系の多様性」「種の多様性」「遺伝子の多様性」という**3つ**のレベルで定義する。生態系の多様性は、高山生態系、森林の生態系、浜辺の生態系、サンゴ礁の生態系、河川の生態系といった具合に、生物群集が気候などの物理的環境条件に応じて作りあげる様々な環境の多様性である。種の多様性は各生態系の中に暮らす生物種のバリエーション、遺伝子の多様性は各生物種の中の遺伝子のバリエーションである。このように生物多様性は**3つ**の入れ子構造でとらえられている。

さて、この多様性の何が重要なのか。いろいろなとらえ方があるかと思うが、テキストでは、「私たちは生物たちから多種多様なサービスを受けており、多様性が減少するほどそのサービスは減り、そして多様性を減らしているのは私たちの生活である」ということを教えてくれている。

国連主導による**ミレニアム生態系評価**ではその**生態系サービス**を、**供給サービス**、**調整サービス**、**文化的サービス**、**基盤サービス**という**4つ**に分類している。供給サービスは様々な資源供給で、自然の恵みと言われれば真っ先に思い浮かぶだろう。調整サービスは気候調整機能や水質浄化機能などを指し、文化的サービスとは精神的・宗教的価値や自然景観などの審美的価値やレクリエーション、基盤サービスは栄養塩循環、土壌形成、光合成による酸素供給などを指すという。

これらのサービスを受け取っておきながらぶち壊しにしているライフスタイルってどうなの、という話である。

自国に高山がないので、日本の山にやってくる人たちがいる。文化的サービスを欲しているのだ。グランドキャニオンが見たいとか、死海に浮かんでみたいとか、そういうものもそうである。高山もライチョウに会えるかな、と期待していくとちょっと楽しくなる。会えなくてもいいのだが、会えた時には喜びがある。それが価値である。人が人らしく生きるために、必要なものを与えてくれているのだ。

私は登山や、ライチョウの研究を通じて山からいろいろな「価値」を受け取った。人生が救われた。受け取るばかりではいけない、お返ししなければならない。こうしていろいろ書き綴ることもその一つのアクションである。



<11月初頭の日光戦場ヶ原>

華嚴の滝の北に位置する高層湿原。

昭和初期にカラマツが植林されたが育たず、2m程の丈で成長が止まっている。

その一方で、近年になって植生保護の為にシカ柵によるゾーニングを行っている。

私たちが守りたいものについて、考えさせられる風景だ。

7. 終わりに

そんなわけで、いかにも受かったかのように書いているが、実は結果待ちである。

合格ラインは70点。公式問題集でも70点を割ったことはないのでもあ受かっているだろう。が、私の記憶は1週間しか持たないので、早く書かないと忘れてしまう。今日この日がタイムリミットなのだ。いずれ記憶が1日でリセットされる日が来るだろう。このペースなら60歳を待たずに幸せな世界に行けるかもしれない。

合格すればエコピープルとして認定されるらしい。そうなるとエコピープルを自称しても怒られない。「それはエコピープルとして言わせてもらうけど良くない行為だよ」とか言っても相手はエコピープルが言うんだからしょうがない聞いてやるか、と思ってくれるという大変便利な資格である。

冗談はともかく、エコ検定は様々な企業で環境教育の為のツールとして社員に取得を推奨している。学習期間は1か月もあればいい。各地の商工会議所で受験できる。現在のところ受験者は延べ36万人という。何か具体的に環境保護活動をしたいけれど、何をすればいいかわからないという方にもアクションの一つとしてお勧めしたい。

様々な情報があふれている現在、公平で科学的な視点から学び、何が真実で何が重要か見抜く力を身に着ける必要がある。テレビや新聞に出ている誰かヒーローみたいな人が「救う」のではなく、「守る」のでもなく、私たち自身が身近な自然と「共に生きよう」と言って行動することが大切だと思う。そうすれば、身に宿った魂も救われるのではないか。

<追伸>

文中に唐突に現れる写真は、事務局から「もっと写真を」と請われて、2015年に私が行った場所で私が撮った素人写真を半ば強引に挟んでみたものである。しかし、こうして並べてみると本文と全く関係ないようで関係があるような気もするから不思議である。楽しんでいただければと思う。